

## けふこのへにほひぬるかな

第7期 OG 菊盛 真衣

私がゼミで「センパイ」という立場になって、今年で3年目になります。私は、アネゴ肌と呼ばれる部類の人間かと思います（アネゴをこじらせてもはやお局かもしれませんね、というか、自分ではアネゴ肌だなんて実は思ったことないんです）が、先輩キャラか後輩キャラかと問われると、後者であると断言すると思います。ここでの「先輩キャラ」というのは、後輩にお酒を飲ませるのがうまいことで、「後輩キャラ」というのは、先輩にフラれたお酒をとにかく飲むことと、勝手に定義しています。そんな自称後輩キャラの私は、今は先輩として、いかにうまくゼミの後輩にお酒を飲ませるかということに日々苦心しているわけなのです。

とんでもない話が始まったと、おいおいキクモリ、ここでも酒の話かと思われる人も少なくないと思いますが、酒の話が本題ではないですのでもう少々お付き合いください。さて、このOB会誌を手にする誰もが、どこかで必ず、少なくとも小野ゼミでは、先輩と呼ばれる立場になったことがあると思います。そして、出来れば後輩にとって良い先輩でありたいと思ったことでしょうか。とはいえ、果たして良い先輩とは何なのでしょう。一体、我々は、どうしたら良い先輩になれるのでしょうか。

この問いに、私はまだ明確な答えを見出せていません。もしかしたら、正解なんてないのかもしれませんが。しかし、答えの代わりに、私は、「先輩」であるにあたって、いつもこれだけは守ろうと決めている先輩からの教えが1つあります。その教えというのは、「まわりの人を楽しませるには、まず自分が一番楽しまなアカン」です。これは、私の中で、2を争う「先輩キャラ」な、小野ゼミのある先輩が、謝恩会で残したメッセージでもあります。このメッセージを聞いて、先輩と飲むのがなぜあんなに楽しかったのか、先輩にフラれたお酒を不思議と飲み干せたのはなぜなのか、そして、先輩の卒論執筆に巻き込まれても嫌じゃなかったのはなぜなのか、何となくすべてわかったような気がしました。そして何より、その先輩は、私にとって良い先輩だったなと改めて実感した記憶があります。



「ある先輩」と、不味そうなお酒を喜んで(?)  
飲み干そうとしている3年生の頃の著者(左)

その先輩がゼミを卒業し、私は新しい後輩を迎え入れました。先輩になりたての頃は（今でもあまり変わらないのですが）、出来の悪い資料やプレゼンテーションに対して激怒し、やる気のない後輩に激怒していました。後輩含め小野ゼミという組織がより良くなるように自分なりに全力を尽くしていたわけですが、先輩として激怒することが本当に最善なのかとよく自問自答したものです。出来るなら、怖い先輩ではなく、良い先輩になりたいと思っていたからです。そんなときいつも頭に浮かぶのは、例の先輩です。自分にとって良い先輩だったあの人は、良い先輩になろうとしていたのだろうかと考えてみると、たぶんそうではなくて、単純に先輩自身がいつも一番楽しいようにやっていたのだということを思い出しました。

程なくして、私は良い先輩になろうとするのをやめました。例の先輩の教えどおり、まずは自分が一番楽しんでやろうと、研究も、ゼミも、飲み会も、ありとあらゆることに情熱を注ぎ、自由奔放に、時に滅茶苦茶ではありながら取り組みました。今年度は修士論文という大物を相手にしながら、国内で3回、海外はソウルとパリで2回の学会報告をこなしました（ちなみに後1回ラスベガスの学会も残っています）。修士課程2年間の集大成としてふさわしい、過酷ながらとても充実した年になりました。この1年間、研究の方は、目の前にやることが山積み状態なのが常でしたが、当の本人は、なんくるないさ～といったかんじで、間を縫って後輩の卒論を手伝ったり、しょっちゅう後輩と飲みに行ったり、ゼミ合宿の飲み会で踊ってみたり、OB会の副幹事業を試してみたり、お陰様で好き放題楽しくやらせていただきました。

そして、つい先日、私の修士論文がやっと完成したときのことです。完成を祝して、私は自分で

飲み会を催し、メーリスでゼミのみんなに参加を呼び掛けましたが、誰が来るのか、何人来るのかもわからずに、お店に行きました。まあ、2、3人は来てくれるんじゃないかなと、淡い期待を抱きながら。すると、予想に反して、9人ものゼミ生が集まってくれたのです。泣きました（心の中で）。さらに驚いたのは、9期生から、そして、10期生からも、別々に修論完成お祝のケーキをいただきました。誕生日だって、普通は1個なのに、同じ日に2個もホールケーキをもらえるなんて。さすがにこれには泣きました（心の中で）。その日来てくれた、千葉貴宏氏、毎川絢子氏、水田弥英氏、島崎啓介氏、菅原隆史氏、戸羽智美氏、



(上) 2012年7月 国際学会その1 @韓国・ソウル  
(観光中の景福宮にて 著者は1番左)

(下) 2013年1月 国際学会その2 @フランス・パリ  
(学会会場の ESCP Europe にて 著者は1番左)

渡邊光平氏，石井隆太氏，栗原さゆみ氏には，この場を借りて深く御礼申し上げたいと思います。みんな，本当にありがとう。

私は，先輩として後輩に何かをしてあげようと思ってしたことはい度もなく，ただ自分がやりたいようにやってただけです。自分が楽しいようにやるのに彼らを巻き込んだような感覚さえあります。彼らにとって，私は決して「良い先輩」ではないかもしれませんが，例の先輩の教えどおりに，私が一番楽しんでまわりの後輩も楽しかったのなら，それで彼らのゼミ生活にほんの少しでも彩りを添えられるのなら，そして，彼らが卒業後も私と久しぶりに飲みたいなと思ってくれるのなら，それでよしとしようじゃありませんか。まだしばらくは，小野ゼミで「センパイ」をやることに決めた私ですが，今と変わらずこんなかんじの先輩でいようと思っています。当面の目標は，もっと後輩の役に立つようなことを言えたり，やれたりするようになることです。日々是鍛錬です。

さて，このエッセイのタイトルですが，今年も昨年のエッセイ同様，百人一首の「いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな」の一部を取っています。この歌は，伊勢大輔という歌人が，奈良から届けられた八重桜の献上品を宮中で受け取る際に，藤原道長に即興を頼まれて詠んだものです。かつての古き都，奈良の栄華を偲ばせる豪華な八重桜だけでも，九重の宮中で今の帝の御世はさらに美しく咲き誇っているようだ



全部で 200 ページを超えた著者の修士論文

託して，今の宮中の栄

華をほめたたえた歌らしいです。自分がゼミ生だった時の 2 年を振り返ってみると，仲間と共にゼミ生活に熱中し駆け抜けた，とても充実した時間だったと思います。しかし，この修士課程の 2 年間は，楽しみながら研究に打ち込んだり，センパイとして前よりもっと楽しくやれるようになったりと，ゼミ生だった時の 2 年間より，さらにパワーアップして，実り多い時間を過ごすことができた（自分の中で密かに）思います。春の訪れが待ち遠しい折，修士課程を（無事に行けば）もうすぐ卒業する今の自分の気持ちをこの和歌に乗せてみたわけなのです。



(上) 1 個目のお祝いケーキを 9 期生から貰い，上機嫌の著者

(下) 10 期生から貰った，2 個目のお祝いケーキ